いバランスを保って、両方うまい具合でやっていこう、っていう考えを持ってるんですけど、そうじゃなくてやっぱりもう仕事に全力で打ち込みたいというか、自分の生活を犠牲にしてでも全力でできる仕事に魅力を感じた時には、教員という選択肢が出てくるかもしれないなとは思います。」

この背景には、教職という仕事の条件が制度的に可変的ではないという視点から出発しているという Q の認識上の特徴がある。この認識は、ある意味ではバーンアウトをする内的な条件にもつながる可能性もあり、その点で教職から距離を置き、かつ、再チャレンジの可能性にも言及しないことは一定の合理性をもつ。たとえば、以下の見方は、よき教員像から派生しがちなメンタリティを自覚していることを示している。

「…ただ、その、子どもたちのために、やりたいことが多分溢れてくると思うんですよ。実際に子どもを目の前にして、これをやってあげたらいいだろう、あれをやってあげたらいいだろうってことが多分浮かんでくるだろうし、自分としても毎日色んな発見があると思うので、試行錯誤したいだろうなとか思って、そういう風に考えるから、やりたいことがどんどん増えていくから、お仕事の時間が、勤務の時間が長くなるなっていう風に感じていて。苦に思って長い時間働いている先生はそんなにいないんじゃないかなって思うんですけど、やっぱりそれを毎日繰り返し、何年、何 10 年単位で繰り返していくと考えると、自分はやりくりできるのかなとか、感情移入し過ぎてしまうんじゃないかとか、自分の理想と目の前の子ども達の現実、そのギャップに耐えられるのかなとか、すごく色んなことを考えさせられる職業。」

「賃金は上がったから教職を選ぶ…」ということにはならないという意見もある。たとえば、R は、以下のように応答している。

「（給料がものすごく高かったら？→）それこそ魅力っていうふうに考えると、増すとは思いますけど、だから選ぶっていう風にはならないかなとは思います。もちろん、それで選ぶ人も出てくるとは思うんですけど、安定してますし。」

これらは少数意見であり、多くの者に共通して認識される「回帰」の条件は、よりよい労働環境であり、それは何より教員定数の改善による労働環境の正常化を意味している。労働環境の劣化こそが、かれらを比較的早期から志望し、教職課程を履修してもなお教職を選択しなかった最も重要な背景要因であるといってよい。F の意見は典型的である。

「労働環境が改善されて、何でしょうね。ちゃんと、まともな労働環境になってくれ